

印環細胞型の形態を有した膀胱原発腺癌の1例

浜松医科大学医学部附属病院

*高橋珠里、澤田早織、佐藤初代、馬場聡

【はじめに】

腎盂・尿管・膀胱の粘膜は尿路上皮で被蓋されているが、同部位から腺様構造を示す様々な病変が発生することが稀にあることが知られている。今回我々は、膀胱に発生した印環細胞癌の一例を経験したため報告する。

【症例】

79歳、男性。S状結腸癌（tub2）、肺癌（LCNEC）、胃癌（tub2>por）の既往あり。2022年X月、突然の腫瘍マーカー上昇があり、その後も上昇傾向が続いた。CTで膀胱壁の肥厚を認めたが、臨床的には浸潤性の膀胱癌としては非典型的で、上皮内癌や慢性膀胱炎が疑われた。

【細胞像】

孤在性または結合性の乏しい集塊状に異型上皮細胞を認めた。それらの核は偏在し、大小不同や細顆粒状のクロマチン増量を呈した。また、比較的大型で明瞭な核小体を有しており、細胞質には粘液様空胞がみられた。以上の所見から、腺癌が推定された。

【組織像】

粘膜被蓋尿路上皮には明らかな腫瘍性変化を認めず、やや浮腫状の粘膜固有層に、主に印環細胞型を呈した低分化腺癌の浸潤性増殖を認めた。細胞質内の粘液様物質はPASやAl-Blueに陽性であった。免疫染色ではCK/CAM5.2(+)、GATA3(+)、CD10(+)、Uroplakin II (+)を示し、一方で胃癌、大腸癌マーカーの各種は陰性であった。免疫組織化学的には尿路上皮細胞、特に傘細胞の形質に矛盾せず、膀胱原発の印環細胞癌と診断された。

【まとめ】

非常に稀とされる膀胱原発の印環細胞癌を経験した。膀胱に発生する悪性腫瘍の大部分は尿路上皮癌である。腺癌の像がみられても、今回のような既往では、他臓器由来腺癌の転移や直接浸潤が第一に疑われる。稀ではあるが、膀胱原発の印環細胞型の形態をとる腺癌も発生しうることを念頭において、これからの診断に繋げたい。